



「Web 2.0」ってな～に？ 核心編

登場人物は...

薬学部の大学生:舞  大学の先輩:大輔  薬局の主人:修一郎  料理店の親父:通称“仙人” 

【前回までのあらすじ】

Web2.0のさわりを聞いたが雲をつかむような話でピンと来ない。今回は、もう少し突っ込んだ話を聞いてみようと思心に行ってみたが・・・

テレビとWeb2.0？

最近、戦後生まれの団塊の世代が定年退職するというニュースや、昭和の古い映像が流れることが多い。仙人は店が休みなので居間でそんなテレビ番組をポーっと見ていた。

「久しぶりに東京タワーにでも登ってみるか」

そんなことを考えていたら、舞が元気に入ってきた。

「おはようございます」

「おはよう。良く来たね。ところで、舞ちゃんの世代ってテレビを見るの？」

「私は携帯のワンセグで見たりしますよ」

「最近、テレビの視聴率が落ちているらしいね」
「だって、好きな時に見れないのは不便じゃないですか。映画はDVDで見れるし、インターネットのニュースサイトもありますからね」

「僕が舞ちゃんくらいの頃は、テレビを良く見たものだよ。力道山のプロレス中継、シャボン玉ホリデー、ひょっこりひょうたん島とかね。

それに、夜中に、こっそり11PMなんかも見ていたなあ」

最近、当時活躍した芸能人の訃報が続いて一つの時代の終わりを感じていた。

「昔のテレビは、観音開きの戸棚に置かれたりして、もっと威厳があったものだよ」

「最近、汚職や捏造問題で、テレビの信用はガタ落ちですね」

「番組もつまらなくなったしね」

「面白くないですよー。最近のテレビは。…仙人、早速ですが、今日はWeb2.0の講義の続きをお願いします！」

「そうだったね。では早速。このテレビから始めるとしようか」

「えっ？テレビとWeb2.0って関係あるんですか？」

舞、“集合知”を知る

「“キーワードを入れて検索”というTVコマercial見たことあるかい？」

「あれって、ネットへ誘導しているんですね。少し高い買い物ときは、舞もネットで調べますよ」

「実は、それがWeb2.0に関係しているんだよ」
「そうなんですか？」

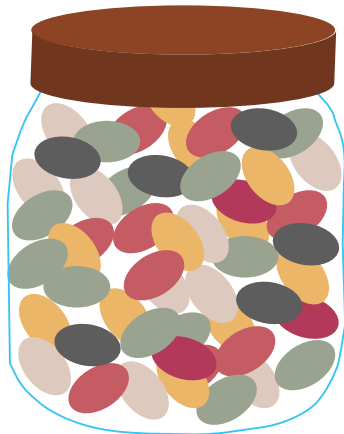
「舞ちゃんは、“集合知 (collective intelligence)”
って言葉を知っている？」

「いえ。あまり聞きなれない言葉ですね」

「“集合知”の厳密な定義はないんだけど、『みんなの意見は案外正しい』という本の中に、面白い具体例が載っているんだよ」

「どんな話ですか？」

「ジェリービーンズって食べたことあるよね」



「スーパーとかで売ってる小指の先くらいのカラフルな甘いお菓子ですね」

「ある教授が学生を何十人が集めて、ビンの中に入っているジェリービーンズの数当てさせる実験をしたんだ」

「ずいぶん簡単な実験ですね」

「特別に数当てが得意な一人の学生と、その他大勢の普通の学生を比較すると、普通の学生が出した値を平均した方が良い成績がでるそうなんだ。それを“集合知”と呼んでいるんだ」

「わかったような、わからないような…」

「じゃあ、もう一つ分かりやすい例を出そうか。言葉の通じない町に1人で旅行に行ったとしよう。テレビもラジオも、新聞も、もちろん、インターネットもないホテルに泊まったとするよ」

「いまどき、そんなホテルは流行らないでしょうね」

「仮定の話だよ。そこで、今日は雨が降るかどうかを知るにはどうすれば良いか分かるかね？」

「う～ん…。下駄を投げる！！」

「おいおい！下駄を投げるより、はるかに確実な方法があるんだよ。窓を開けて、通行人が傘を持っているかを観察するんだよ。傘を持っている人が多ければ、雨が降る確率が高いだろう」

「な～るほど！」

「これと同じ事がWeb2.0の世界では起っているんだよ。ネット上には様々な考えを持った人たちがいて、勝手に書きこみを行っている。その内容はブログなどでまとめられて一つの意見に集約されている、よね」

「Web2.0の環境では、ジェリービーンズの実験や天気の話と同じ事が起っているということなんです。…え～と、この話の出発点は、テレビコマーシャルの“キーワードを入れて検索”がWeb2.0と関係してるって話でしたよね」

「そうだよ。検索の話から、Web2.0の世界では“集合知”が働いているって話になったんだ」

「となると、インターネットの検索と“集合知”の関係がこれから明らかになるわけですね！」

検索と“集合知”

「その通り。この“集合知”をうまく使っているのがGoogleなんだ。Googleは、PageRank™というアルゴリズム*を検索の仕組みに取り入れているんだ」

「最先端を走っているGoogleならではの、ってどこですか」

*はp.24脚注参照

「そうだね。Googleは、検索結果の表示の順番を決めるときに、サイトへのリンクの数を基準にしているんだよ。リンクがたくさん貼られているということは、それだけたくさんの人に評価されているということになるよね。リンクの多いサイトの方が有用で信頼できると判断しているんだよ」

「へ～。キーワードを検索して、上の方に表示されている情報が、信頼できるサイトになっているんですね」

「その通り。莫大な数のWebサイトから瞬時に目的の情報を探すのに“集合知”をうまく利用しているんだ」

「でも、世の中には良い人ばかりとは限らないですよ。ホントにそんなふうに行くんですか？」

「確かに、ネット上には不正にお金儲けをする目的で人を騙したり、ウイルスをばらまいたりする人もいますが、大局的に見ると真面目に使っている人が多いということだね。インターネットは、元々、性善説に基づいて作られたものなんだよ。“集合知”が正しく機能している限り、人類も捨てたものじゃないということだね」

「Web2.0というのは、ネットに参加するたくさんの人たちの善意で成り立っているんですね」

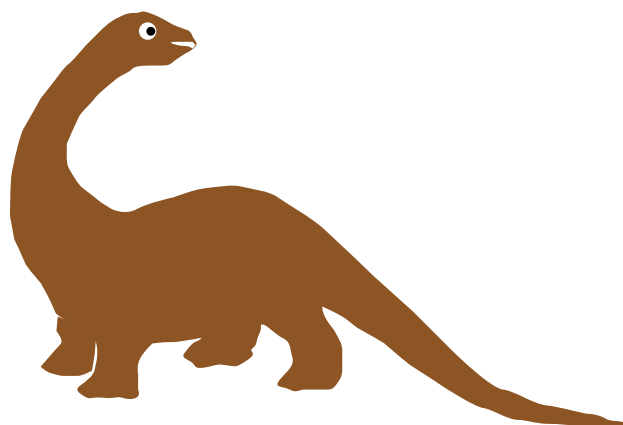
Web2.0では不可解な現象が...

「実は、Web2.0の世界ではもっと不思議なことが起っているんだよ」

「まさか、幽霊が出るとかそんなことじゃないですよ」

「幽霊じゃないけど、恐竜の“ロングテール（長い尾）”が出てくる話なんだ」

「何ですか、“ロングテール”って」



「舞ちゃんは、商品の正しい陳列の仕方を知ってる？」

「売れ筋商品をお客様の目に付きやすい所に並べる、ですか？」

「その通り。薬局でアルバイトしているだけあるね。一般に2割の売れ筋商品が全体の8割を稼いでいると言われているんだよ。80対20の法則と呼ばれて、マーケティングの世界では、かなり普遍的な法則なんだよ」

「それって、感覚的に分かる気がします」

「でも、Web2.0の世界では、この法則が成り立たなくなっているんだ」

「何が起っているんですか？」

「Web2.0的なサービスの代表格と言われているネット書店のamazonでは、売れた順に本のタイトルを並べると何百万冊も売れたハリーポッターなどのベストセラーから始まって、月に数冊しか売れない営業成績の悪い本がずっと続くそうなんだ」

「へえ～。誰が調べたんですか？」

「ネット書店は、全部コンピュータ処理だから、こういう統計は出しやすいんだよ。グラフにすると、あまり売れない本の販売数ながーく続いて、

* コンピュータを使ってある特定の目的を達成するための処理手順。アルゴリズムをプログラミング言語を用いて具体的に記述したものをプログラムという。

それが恐竜の長い尾に似ているところからロングテールと呼ばれているんだ。売上げ順位が40,000位以降の本の売上を集めると全体の25%を占めるくらいになるそうだよ」

「売れない本でも、儲けが出るというのは不思議ですね」

「その秘密は、ネットを使った販売の特殊性から来ているんだよ」

「確かに、amazonは普通の本屋さんとは違いますね」

「店舗がなくて倉庫とデータベースしか持っていないからね」

「陳列棚がないのに、良く商売が出来ますよね」

「amazonは、Web2.0の参加型のツールや仕組みをうまく使って、ネット上で商品を多くのユーザの目に触れさせる工夫しているんだよ。検索を使って何十万冊もある書籍のデータベースから瞬時に欲しい本を探し出せるんだから、ある意味では、無限に広い陳列スペースを持っていることと同じになるんだ」

「ここでも、検索と言うのがキーワードになっているんですね」

「この仕組みのおかげで、数が出ない本でも集めれば大きな売上げになるという“塵も積もれば山となる”的な商売が可能になるんだよ。これがロングテールの法則を成り立たせている理由だよ」

ジェリービーンズや恐竜のロングテールの話聞いて、舞は、ようやくGoogleやamazonがWeb2.0的な企業だと言われている理由が分かったような気がした。Web2.0というインターネットの進化で、今までの常識を覆すようなことが起きているのだ。舞は、仙人にお礼を言って店を後にした。

結局、Web2.0ってなんだ？

仙人は、舞が帰ったあとWeb2.0について自分なりに4つのキーワードで整理してみた。

① バリアフリー

通信料金が低い、アクセスが速い、使い勝手が悪い、セキュリティが心配、という障壁が取り払われて、誰でも簡単にネットに参加できるようになった。

② インタラクティブ

今まで情報を見ているだけの人が、ブログなどを使って気軽に発言できる環境が整った。

③ オートメーション

Webサイトが24時間無人で注文を受け付けるなど、ネット上のサービスが、ほとんど自動化されるようになった。

④ オープンソース

サービスは、誰でも自由に使えるオープンソースで開発され、ネット上のサービスがほとんど無料になった。

ここまで考えて、自問自答した。

「これをひと口で言うと何だろうか？」

Web2.0とは、Webが人間の方に歩み寄って来た、ということではないだろうか。テレビが一つの時代を作ったと同じように、Web2.0がこれからの新しい時代を作っていくだろう。

この素晴らしい技術を使って、どんな面白いことをやるかは、ユーザ自身が考えることだ。これだけは、どんな優秀なコンピュータを使っても自動化することはできないのだ。

次回に続く・・・